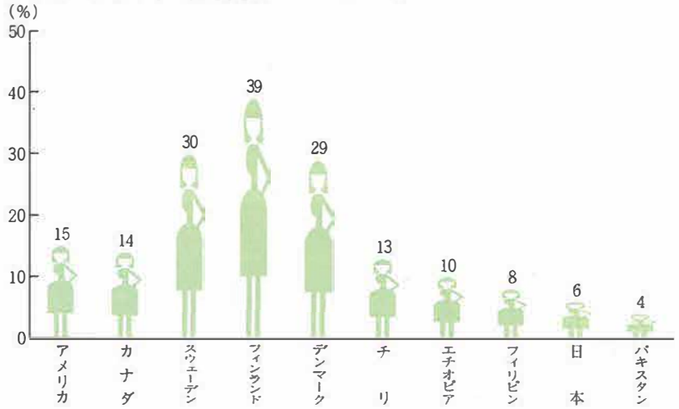
世界の女性 日本の女性　知っていますか　こんな数字

●世界の女性閣僚について



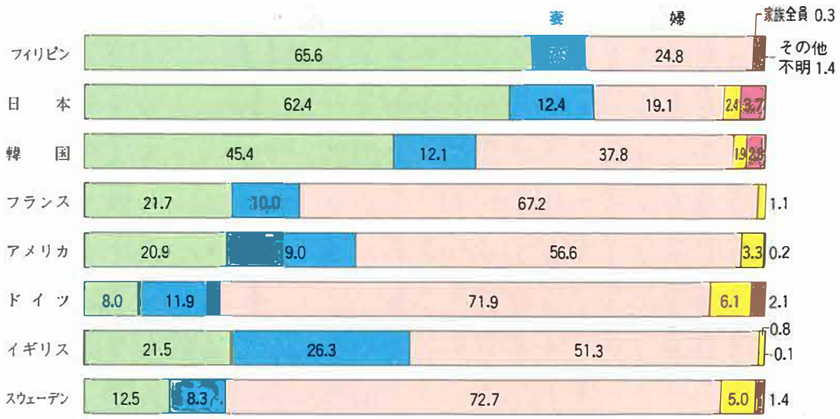
女性の大臣はどのくらいの割合を占めるのでしょうか？（%）

資料出典：『人間開発報告書　1995－ジェンダーと人間開発－』国連開発計画（UNDP）

●性別役割分業について

「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という意見に賛成ですか？反対ですか？（%）
対象：各国1,000人の青年男女（18～24歳）

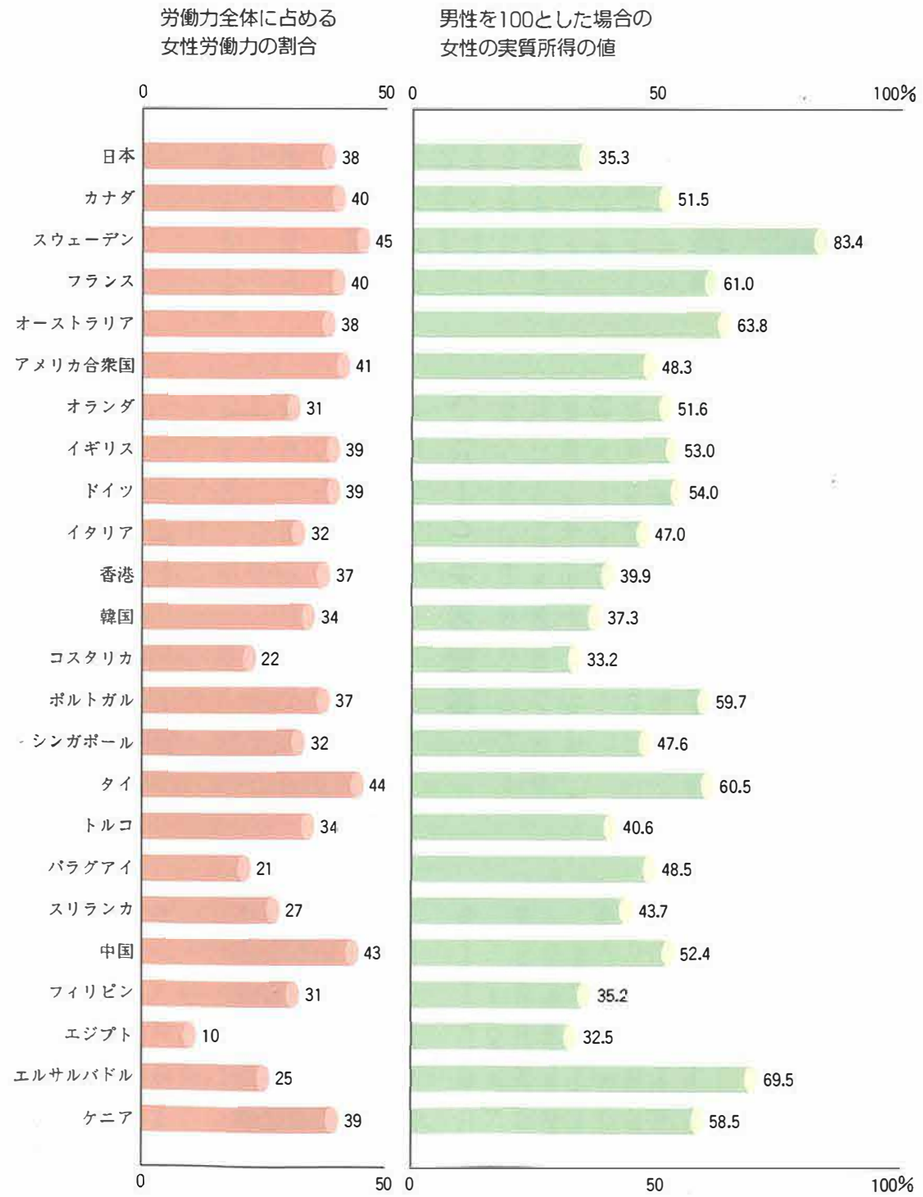
資料出典：総務庁『第5回世界青年意識調査報告書』（平成5年）



家庭において全体的な実権を握っているのは誰ですか？（%）
対象：各国20歳以上の既婚女性

資料出典：東京都生活文化局『女性問題に関する国際比較調査』

●女性の労働力と実質所得について



実質所得については男女の賃金率と労働力率の男女差の両者を使って計算されています。

資料出典：『エンパワーメントの女性学』村松泰子・村松安子編、有斐閣選書

男女混合名簿

今、県内の学校では、男女混合名簿が採用されつつあります。

なぜ男女別名簿が問題なのでしょうか。

それは、男女別の出席簿が無意識のうちに子どもに差別意識を植えつけているのではないかということです。毎日の出席の点呼でいつも男子が先に呼ばれるのを聞いて、知らず知らずのうちに子どもたちに男子優先の意識が染み込んでしまうのではないかということです。

平成8年の静岡県教育委員会の調査によれば、公立小中学校では32.3%、公立高校では81%の学校が混合名簿を採用しています。

焼津市では、平成8年度から市内の小中学校18校と市立幼稚園4園すべてで男女混合名簿を採用しています。そこで、焼津市の宮澤宏教育長にお話を伺うことにしました。

宮澤教育長は、以前、県教委社会教育課長から県立浜松西高校の校長として赴任された時、男女混合名簿を採用しました。それは、男女別の名簿に疑問を持ち、教育の場で性別に分ける必要があるのだろうか、むしろ男女平等教育のためには、男女混合名簿を採用するべきではないかと考えていたからです。

ところが、その後、焼津市教育委員に任命され、市内のある中学校の卒業式に出席すると、男女が別々に入場し、男子が先、女子が後に呼名されていることに驚いたそうです。

さらに、平成6年10月に、焼津市教育長に就任し、市の教育状況をみると、小学校では64%が女子教員であるにもかかわらず校長・教頭等管理職が一人もいないことは不自然だと感じました。そこで、7年度の人事異動において、女性の教頭と教育委員会指導主事を誕生させました。その指導主事を中心として、各学校の教務主任が集まり、ジェンダー[*1]について勉強しました。そして、男女混合名簿の採用についても考えてもらいました。さらに、教務主任が各学校で他の教職員と勉強し、検討していったそうです。

その結果、教職員にジェンダーフリー[*2]の考え方を浸透させ、男女混合名簿の採用に踏み出しました。

今、学校では混乱もなく、子どもも保護者も自然に受け止めています。特に女子教員には好評でした。

「子どもたちは、出席簿だけでなく、靴箱や整列の順番など、学校生活全般で、男女の区別をしないことによって、男女いっしょという意識が生まれたのではないでしょうか。また、性別で分けることに疑問を感じていなかった人々の意識も変わったようです」

今後も混合名簿を取り入れる学校が増えていくものと思われます。

皆さんの地域はどうでしょうか。

焼津市教育長の宮澤宏さん

サッカー レフリースクール

静岡県で注目度の高いスポーツといえば、やっぱりサッカー。2002年ワールドカップ開催地決定のニュースも、記憶に新しいところです。「サッカー王国」と称する静岡県だけあって、サッカー愛好者が多く、Jリーグで活躍するプレーヤーも数多く輩出しています。また、県内のサッカーチームの活躍に、多くの県民が期待と関心を寄せています。子どもから大人まで、生涯スポーツとして楽しんでいるサッカーですが、今や男性だけでなく、女性のプレーヤーも増えてきました。

数年前までは、サッカーといえば、男性のスポーツというイメージでした。しかし、スポーツの世界でも、男性、女性という境がなくなりつつあります。サッカーにおいても、学生、社会人の女子チームは確実に増えて、女子サッカーの試合も注目されるようになってきました。そして、今年、大阪で開催される国体から、女子サッカーが正式種目となります。

そんな状況の中、女子の試合は女子の審判でという傾向がでてきました。しかし、女性の審判は、まだまだ少ないのが現状です。そこで、県サッカー協会では、女性の審判を育成するために、サッカーレフリースクールを開校しました。受講生は、既に4級を取得している16人。10時間の講習と19試合以上の実技を行い、試験に合格すれば、3級の資格が与えられます。

レフリーの資格は1級から4級まであり、それによって、主審[*]、副審のできる試合が決まってきます。1級で全国、2級で東海ブロック、3級で県のレベルの試合の主審ができます。県内にはまだ、1、2級の資格をもった女性はいません。3級も数える程です。しかし、このようなスクールをきっかけに、審判を目指す女性が増えていくのではないでしょうか。

昨年12月に、焼津市で行われた実技指導の会場におじゃましてみました。実技指導は、中高年や少年のサッカーの試合を利用して行われています。一人一試合ずつ審判をして、指導員からアドバイスを受けます。この日、この会場での受講生は高校生3人。

その一人、若杉慶子さんは高校3年生、女子サッカー部に所属しています。

「なかなか大変ですが、ぜひ3級を取りたい。そして、今後もサッカーに関わっていきたいですね」と抱負を語ってくれました。

受講生を目で追っていくと、素人目にも、審判の大変さがわかります。試合中常に走っていて、それもボールの動きによって、方向やスピードを変えなければなりません。また、常によく見ていて、素早く正確な判断を下さ

*1ジェンダー　男らしさ、女らしさといった社会的、文化的に作られた性差をいう。

*2ジェンダーフリー　性をめぐる固定的な先入観から自由になり、柔軟な男女観をもつこと。

なければなりません。かなりの体力と集中力が必要だと感じました。

審判は、選手に比べて地味な存在ですが、影の演出家だと言われます。適正なジャッジが試合の流れをつくり、良い試合になるかどうかは審判にかかっているといってもいいくらいです。

今後、東海地区で、3級取得者の中から、2級審判の養成を行います。受講生の中には、国際審判まで目指している人もいます。

2003年には、静岡県で国体が開催されます。このとき、彼女たちが、サッカー女子の試合で笛をふくことになるよう、今後の女性審判の活躍を期待しています。

主審（レフリー）　競技などで優劣、勝敗やプレーの適否を判定する人

副審（アシスタントレフリー）　以前は線審（ラインズマン）と呼ばれていた。昨年より副審に変更

試合でレフリーとして活躍する若杉慶子さん

ふるさと通信

「ふるさとを思い出す機会になってくれればよいと思います」と昭和61年4月20日『中川根ふるさと通信』は創刊されました。それから11年、ふるさと通信を編集、発行してきたのは中川根町上長尾に住む小澤節子さんです。

ふるさと通信は、四季折々の中川根の自然と話題、歴史・文化、読者からの寄稿を小澤さん自筆の文字と挿絵で綴る心温まるミニ新聞。年4回、中川根町出身者やこの町をふる里と思ってくれる人たちに送られています。

今から14年前、川根、中川根、本川根の3町の人たちでモア・ラヴ川根ふる里づくりの会ができました。そのとき、市出身者に情報誌を送っているというある街の話を聞き、「これくらいならできるかも知れないな」と思いました。小澤さんの心の中に、作家松谷みよ子さんの『花いっぱいになあれ』という本の中で、子どもたちが花の種をつけて飛ばした風船が、野山に根付いて花を咲かせるというお話がありました。

その後、中川根支部ができたのを機に、役場へ情報誌発行の話をしたところ、「やってみたら」と言われ、創刊したのが始まりです。当初は、二〇〇部でスタート。現在は九〇〇部に増えました。50号までは続け、発行部数を一〇〇〇部まで増やしたいとのことでした。

取材・編集の作業は大変ですが、「やるからには石の上にも3年」という気持ちと、「*やっちゃわにゃあならん」という思いでやっています。30号までは、小澤さん自身が取材した記事が多かったのですが、それ以降は投稿もあったり、いろいろな分野の方にも寄稿してもらい内容も充実してきました。自分自身の勉強にもなり、新しい友達がたくさんできて、何よりもよかったと語っています。

また、「批評、提言等もあり、皆さんからの反応が嬉しかった」という思いが11年続く原動力になっています。読者からは、記事の感想や、この通信によって知人の消息を知ることができたなどの喜びや励ましの手紙も寄せられています。

妻として、三男一女の母として、また、夫の経営する製材所の事務担当としていろいろ多忙ですが、そんな小澤さんを支えている最大の理解・協力者は家族です。夫の勝彦さんは、車の運転免許を持っていない妻のために、写真撮影や取材には、運転手として必ず同行してくれます。また、昨年1月になくなった「おばあちゃん」（義母）は、家事などいろいろな面で助けてくれました。「一緒に28年暮らしましたが、素敵な人でしたよ」と語る顔は、嫁というより娘そのもの。

家族の協力によって発行される通信は、あたたかい心のたよりとして、遠く中川根を離れて読む人たちのもとに届きます。また、まさに、この通信はふるさとと読者の心を結ぶキャッチボール。

ふるさとの思いを風船にのせて飛ばしたい思いから始めた『中川根ふるさと通信』は、山の香りをのせて北海道から九州まで飛んでいきます。

*やっちゃわにゃあならん　川根地区の方言、やってしまわなければならないという意味

ふるさと通信は
心のキャッチボール

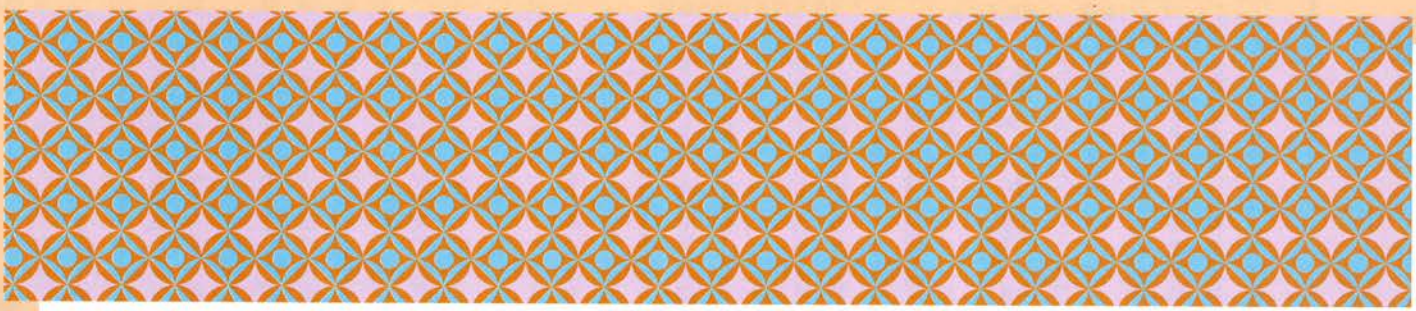
《表紙デザイン》
静岡県デザインセンター　小杉恵主世（こすぎしずよ）さん

編集にあたりご協力をいただきました皆様に、この場を借りまして心から感謝申し上げます。
〈編集員一同〉

わっかっよく
No.30

発行　平成9年3月
編集　静岡県女性総合センター
住所　〒422 静岡市馬淵1丁目17−1
電話番号　054−250−8107

企画・編集
伊藤千恵子さん（浜松市）
阪口　智子さん（浜松市）
谷　敬子さん（清水市）
平野　功子さん（浜北市）
吉田　由香さん（静岡市）
編集アドバイザー
太田　榮三さん（熱海市）



静岡県

この冊子は再生紙を使用しています。